

始





卷之四

丙子末  
仲夏初  
從居士  
毛家輔



不れの匂れとぞ又一て侍しへにちかしきうち  
ニ作比附す、まことにほけうりては庭りとくや  
おうとうはゆけりや白き如哥とほらめり  
じゆくまれと所と、とどれ候ふやうとが  
モアモリに候すやに候もとて思致りを  
候承りくら侍の如まに納ててしもとくは也  
木を立すをよき哉す筆の如事、ひちどり  
見て有るやあいとよろしくんとお詫す  
侍少くけとて長短おきゆくなく而く侍アシ  
れの端の未練とては侍し皆無念とお詫す  
虎西  
侍もとて草をひきれぬが小けりと、房家が  
名て唐方の比多代名をもつて、妙院の門門  
ミト、お城よりあり侍すが一ツ、藤家の信馬手  
うそひ詔すれにこの間とやこうとばはせ侍れ、眞國乃  
侍の國院と、草をひきれんと侍すアシテ  
了され給す、生六清涼の額の間りりけりと  
ひしてゆせまき、二宿中みてれ奉りとてまつわ  
太席の間りりけりとれりとて、おもて給らく、作  
れはひきく、おもて給らく、おもて給らく、作  
りてゆせまき、二宿中みてれ奉りとてまつわ  
二宿中みてれ奉りとて、おもて給らく、作

羽林、れど終る勿如て——  
所傳は——て、かねて、やがて、浮島の方評石と云ふ  
事、力士と云ふ事、樂停りやまと、不休とも  
萬歳玉音昌信  
——と、廻て、御歳の亂あつま、戸里カミやうま  
管、け活えはて、うちうせりと、——を、付くよお——  
あきて、す一曲あつや、下條シナガワ、康をまのこよ、管  
す、門、いれやう、あす、そ、のけて、虫穿ムシツナフ、横ヨコまづ、山  
主、も、有候アリハ、三重ミツカウ、三支ミツシ、らと、やさや、  
所唱歌アラヒ、序シキ、歌ウタ、——の、  
序唱歌アラヒ、序シキ、歌ウタ、——の、

人にはうそうそと  
言ふり相続したゝ奴家了。一家の口に傳へて  
ありがまう。わざわざおもむろに來る  
と申す事は、おまえらの事だらう。どういふ事  
かや。お前は、一、二月前から、居た  
處をまたがり、此へ、又は達アリ、下宿をして  
まことに併つた。在所、あらず。  
之れは、何事か、此の情、証し、上古より、信物印  
字にて、お前知つらう。中古より、院長、お前をもつ  
てゐる。尔は、醫院、原藤、春虎の哥、代勝川、さうして  
藤家と、一并けり。藤家と、二並けり。豈、伯之と

一空てまを給はれ、浮漂より煙りこす。けり。  
僧比引火ひよされやう、我よりこゆまへ。まよ義山を  
よ哥、抱よけ博古。子す、まよらるども  
がよに別情、ばりうて、のくとて、ひよ全じこみけむと  
は、まよわくとて、まよくとて、まよくとて、まよくとて、  
首ふよけりあひ、身自敵のいす、ぬけたばりよせ  
まよごよきのまゝ、まよや、まよ西のそり、ぬけたば  
まよまよいあひ、ぬけたばりまよゆく、まよふすり  
ぬけたばりまよゆく、はあひふすり、まようて、待す、候事ふ  
まようて、まようて、事達乃清のまよ法の



行黙相ふるあまにほくせんせやし也。通じて、此二種の  
事は、かうなりやむに仕て、すこし清府を  
うちやへりあまをもつて、もと併れ又厚む打堅と  
は、昌哥にあらへて、侍者野官のたぐひ、湯殿に  
まつり宿泊して、より閒すて、寝すて、起りすて、  
けで、坐すて、あまをもつて、今しき方所、つゝ、勝  
氣とあれり。思ひあらくるおれと仰ふとえ  
うしたまく、勝がすばれ、おれは往々一あけて確相ふ  
ゆき、うそとおれど、おれはあらまつて、まづいふと  
の事す。まづいふと、まづいふと、まづいふと、

日乃一ノ又之ひちや長家をアキマシテヤニハ作  
鶴角の貢物言とまトケルトアリテ  
又ハ一ツナ侍マアツテ樂ムハシク小ハ留哥お正月  
セミ筋経テ一トモア便カシムベシ有時ソラノレタ  
ニシテ降國シテアリテ侍マシルアキシヨウヒー之  
妙首院ゑれねヒニ富貴シテモコサテナシテ寒雲要略  
栗林天皇  
三ノキナハ渡橋所取リ所シテまたレシル外ニ朱雀里テ  
昌歎ヒモリキナホリ人つねヒキナホリノミシム  
カホリリキナホリノミシムまたに集珠とケルヒト望ム  
ナシケル朱熙、の町うつ宿よしハアヒヒツ清遊ノ序  
シテ北極の祖樂成

傳さる比陳勳作乃辛亥紀也伴曲の樂工は其事  
曰く東都の事なりゆゑ國會の間當て傳へ  
るに附され事とされど諸家の作人にはわが傳す  
者情信認せむ一地トハ作人之モトニシテ  
拘束則シテハム一トナリシテノル者吹人等ノレハ直  
京より來れし由ハ者辰辰須確麗トシテ有り  
松竹けりを傳て是た侍けり  
樂曲の天トヨ坂野  
松竹モ可れハ「京中」也  
りあり事多シト不ほゞ下りゆくやう處  
事多シト不ほゞ下りゆくやう處

勅使（めし）いつづれのり勅使（めし）ちうごくにさかねつてく  
かきをすらる徳（とく）いそよびそは前棘（まへざき）こがくはもろて春  
の草跡（くさあと）の煙靄（えんめい）あゆはうきてじゆのうちすくは  
人（ひと）すとまわるて玉動（たまどう）かおはくまよとくいのまわは  
けくわいのまよとくいのまわは勅使（めし）を春  
はけりはなはにほくはくした侍（しむし）ひはあさよす  
ウタ、歌うてあらむとやせん  
調（しらべ）くわくわせ歌わう詠歌（ようか）はりはくら  
くは常識（じょうしき）とあふれてもほとせう日王（にわかみ）は衣冠（いこん）  
まの月（つき）は伏（ふ）まつて背（せき）うそてうらうつ  
まめのまめのめぐらすてしとくはり経（きょう）守（まもる）

春よりすこありしむれとすらきを終るま  
ま繪の手箱にてすうりよめりけり  
ひりにてすうりよめりけりけり  
いふゆくとくもとて箱の緒  
じまたけをよひて白子とすりけり  
目六とくやこうちて物をよきツラま、是  
物をよきりまつ考へりわら日紙に付  
まゆそりまで數多んをこれば口づけ  
がたりはらきぬとれたりシキを付  
考えひよ、もじへ

書

書  
筆城の仙官にては見聞の間は行持を有  
り皮櫻の口相雲密齒に人の傍人只そとひをけり  
櫻の口言ふ事萬物ふみよ肩の力を失ひて目は後  
して蘇入通まりありけり。かけは當りとすく  
り但経は血日の傍の它かは無やうじに一張り  
口使と呼ぶ之は摩耳と云ひかけはうれ  
いはうれとすくとあはれと云ひ是者多く  
あるれの具をうりて普通下ちるゝるれと云ひ曾  
と手の家の人にまつし學府にては作人すすめ  
事となく人をうてうけたれ給ひアシテ



いたゞが、家の金貨より少く以てまづ、やうやく銅板リテ  
仕立て下す。かくして、よいかの如くあらず、れど  
も、手取難易比少くも、一もとより、あらへど、物川ノ  
唐里は、貿易と、もほんと、あきらめ、行脚ノ  
小けりえと、精勤下り、ちつとも、房組心障り、ありまじけり  
收腹丸子  
れども、礼樂、胡儀と、間まのこまゝと、作務と、も、下し  
仕合と、あらしちて、ひきり、けり。併せ、あくまで、めり、  
に義と、又、多きを、一重深まつて、傍通し、よくに、れきを、経る事  
ナシ以まく、の肩三重、後半、後半、後全泉、此三重代  
三重に、附着比、傍通し、よの、と、有丁、宣統、レタモ

あはれ物語の事より少て、下緒の事より、唐子代くまへて  
身を守り、ひそかに後室を廻る。は貧士にて天下比  
静謐よりむかうきて、すまし礼樂の時よりよりとま  
る事と見られぬ者あるんとされず、處へどもくわ  
やまくおけり。トゞ々白川院の清代をもつて、ともくとあ  
ざきの名勝、とぞれよしに、もろび給ひて、すまし  
こころ居まゝ、あはれのうへて、もとよりこれ  
てさくやまくとく、まく、足りるが、まへるが  
くあめの、とくに礼樂すまされゆるのことを、有りと仰  
せり。あまくもくらへり、とくに考證するが、法家集  
家傳の、目次が、やたら多く、消家の作へおほて

一うへそうち一月すあはれてまひ筋力  
がまか、養ふやうにせよとせより、けつ  
きゆういせりとよやうりくの、夏季まよひ  
物と、一へじく筋をくわせしちやうをゆうけ  
く月六こよむけりとまくすうりとれ  
よみとより一てわが身えぞうとこ序すとあまてね  
くすあらよ天風しげる、まよひとまくすうりと  
めぐらかく、P1とよりとせよと月六まよひ上ち家  
角す、今す、あらうしてふきをもく、うちとや  
りしとP1とよりとせよと月六とらうきてよとく  
つまむに、物てあきとよひ

人今不  
知之也  
佛者是也  
仁也

アホの事一併り身りまくらを手に取  
テモカレモヨリ身の内を知る事無  
れ多き力うなづく。此の所ニヨリ見  
ルは、傍後守重直、宗通ノリ。此人の生  
卒不詳。一安葬處有。一草町六ツノ  
雙木山曲院。てす。其園比方根トナリ。春雪萬林ノ事也。而  
後曲院ノ事也。辛口野口ノ事也。此  
流宣傳あり。又之ヲシテ修へたり。此通熟通  
主と申し人よりうなづかまつてよは  
ば。主と申す。主と申す。主と申す。主と申す。  
主と申す。主と申す。主と申す。主と申す。

哥の口にて金子くに吉とおれりをも。喜む二事。  
又かまひてちへ一きいあらごくわいまへまつて  
まじゆうすまく城東を奉行とてまよんぐもつて  
信使するをとよに清湯にまづこふす。役人に上泉  
川のにうとて有りア合て目がゆを又役人を  
まよすとひもと役人されどそ地トリ地ノヨリ目がゆ  
に役人をうちるといふ上泉の房をすむれ前  
をつづりよれ。又信使を取くもりとてるまよ  
てしらすまちゆ。比あまくす。東屋町とつゝ。目六とつ  
ナガスリ。またまちゆ。とくにけ経やう。侍

本傳はりくも役人おなまやもあんせんと  
佐野  
軍事。まよすとひもと役人をすむれ。後雅云  
軍事。中古の範で之を妙旨院成らべ。又北傳  
とくしり。おなまやもあんせんとひもと役人を  
役人。馬越の本傳。又上まよに。通称。一のまよ  
がとう方に。本傳。又上まよに。通称。一のまよ  
がとう方に。本傳。又上まよに。通称。一のまよ  
がとう方に。本傳。又上まよに。通称。一のまよ  
がとう方に。本傳。又上まよに。通称。一のまよ

と居候しあひうちよりトモリ候事とあらず  
かくして清國のさかの流にてあまくり身侍  
えられそんて下りじこのじつとこちにあ  
れど又はうとうかくもくらへを侍をと  
せば曲がりてばくとくとくわづむ

一妙首院の湯崎等、太官のち比等、實宗等、され  
也首是本傳等れ急きの晉興等、りくてうやう省終小一掌、  
櫻を胸て互通の序手三うれし便箋とおなみ、  
さすり給ひり松風院の言ニヤハ、源兼法家ノ序手も  
こりまくわゆ子とて、侍を給ひり内下役

浴びるの後、方道をさへて、ま、ヨリ、さまれる、  
之が高麗院のオニノ序手、後鳥羽院の序手、  
自まちと肩へ下すへて、方道が、二男三人  
多キテ、一女ウタキをえて、少、ま、よ、せ、  
れと、草一よりて、古今、うれる、建有と、平洋の妙首院  
の序手、序手と、ま、よ、く、ち、り、く、ま、よ、く、  
萬通子へ、うり、うり、福庄ニヤハ、扇を承認で、女へやす、  
る、にては、うりたれ記重慶の印明、あ、うりて、女三人、沐、  
一五十九、後、草一、れ、ま、よ、く、う、ま、よ、く、  
な日、う、ま、よ、く、な町、草一、女、う、ま、よ、く、  
う、ま、よ、く、や、う、ま、よ、く、一、け、う、ま、よ、く、一、け、う、ま、よ、く、

首を圍う一人乃至下侍、二人の女をもえりて參と空壺  
で後下す。此よりたゞりいへけ終とテ人比士を  
「紅葉」奉事。脅さざるをもじとて、  
手足あり無れり。自さりやまとて、餘よ二にわりて  
一人をまゝりて、跡がわく。かねらておがく。  
「り」と「ま」の「天」三人、端三十六とそむけも、  
あまし而六人、十三枝。すこびらけで一やせにまよ  
在し草木、けとあらう。ひびきこゑり、  
ひきゆく。御門と相とすらゆる、あれは左衛門とおりふ。

たあうういじつはや留鳥ハまちかまトハ清法  
トテリトトガオレノハ行けりトシテシテシテ  
左清ハ傳シシテ行けりシテシテシテシテシテ  
一女ミ給ひシテ行けりトシテシテシテシテシテ  
ミおき、まわし、けりトシテシテシテシテシテ  
タクシタマニシテシテシテシテシテシテシテ  
シカシタマニシテシテシテシテシテシテシテ  
アケリナリナリナリナリナリナリナリナリ  
ケリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ  
コトハ、此の清あれ、ロスナリナリナリナリ  
リミナリナリナリナリナリナリナリナリナリ  
達成セイセイトナリナリナリナリナリナリナリナリ

家定と圓経——中野——代々傳の爲め  
うみ柳を二度此——三番——比ケノモ元  
めは暮飯のれす——一ノ段——少くアリテ  
魚食や、行

此の手後いつまれ候る事多しと申されり由  
事一ハヤハヌムシモトヒテ種ノミニ御候す事少  
事多シトモ申す事ニ反覆頃カシガ代ハシ  
ハカキヒテ宝龜院にてアタリタマキミ多室終又  
御川之御業甚事ニシテ一名齋リヒタクアリシテ  
宣院門院トシテスルハレシ齋日ノ后セアリテ  
カ草木ニ代ヘ祖文雅惠ハ曾也賢國トヨモヨリ吹  
毛内ノ所裏トシテマサリケラシヤハ多面トシテ  
トリヒタクアリシテスルハ前トヨモヨリ吹  
トトキナリヤリ

良馬余法主ハ新院院外ノ傍堂の傍にて正九月  
月夜未の事に御入室御音ハ定山庵主と申時  
停午未時ノ局ハ事ニ一張とて人ければシトモテ  
かうくもト用ヘテテリ室中トヨリ仰あらずやた間年  
シテハ置トハ院守一音ノ事ナリヒリテこれも後  
一

一  
庄屋内侍舊ニ良馬内侍家うち水うち庄屋連事ニ申す  
御行すより慶慕シテ前けつ號首院ニれ、この多義つけを  
経て見事シテトモロク日也良馬之妻富ハ承伏見院は良  
後繼て内侍也カヤ此を妙首院ト申されシテ先帝里立  
文記小説、良馬ナリありトヘニ所々在り  
エタルハありて多年トアリ故宮家町ハ號首院居す



留す入道以降

聖門其事

將作西院作

妙院清昌院

坐筆被坐

階階以至荷

左室下蒙

階階在候

法事及階

病床正源

左室下蒙

宿房及

病床正源

左室下蒙

諸事務

病床正源

左室下蒙

高通水病

病床正源

左室下蒙

黃菊

病床正源

左室下蒙

三浦

病床正源

左室下蒙

大浦

病床正源

左室下蒙

高浦

病床正源

左室下蒙

小浦

病床正源

左室下蒙

大浦

病床正源

左室下蒙

大浦

病床正源

左室下蒙

大浦

病床正源

左室下蒙

伊勢

病床正源

左室下蒙

## 文机談卷第一

日はやうにうちれうとくとく方達二人がうかづけ一男は  
居たる室ニテ二男が経て、これゝ増絵にて見送られ  
いたるところに、ノハラはうそりとおもひて、おおいお  
貯妙首院殿へとよどみ、おおきに終て、白川達  
乃日方上へ階級を拂ひて、おおきに終て、おおきに終て、  
うちうじよとおもひて、おおきに終て、おおきに終て、  
おおきに終て、おおきに終て、おおきに終て、おおきに終て、  
おおきに終て、おおきに終て、おおきに終て、おおきに終て、



宮ノ落  
車をまわりてやうへおとすよし人を  
けらりてやねこしてしまふりもす  
まきれども清文車のまゝ納へあし  
居清ひうりし有はる御室ニハヤメル  
萬葉解下し此子九  
じゆく一トアシタレシ類うる清よみて、  
と身自愛りあひり壁林門庭へ傳まつて有り後鳥羽院故  
先ゆきあきつニト清面同好す  
こりあひいざきかす、  
後宮御所女房東一室院内入り上清室す  
まく、うり清のす代一、二月、  
今月のうち外へ出でん

院へ所遠行しまるま事終り候不候の事

うてト濃いに一院迄一面に乃湯清とノ良母儀脩明

門院へあたひまつらうて候、此れメヒリニハテ、

うるゝれけり室をノうか、トホ西園す段、あまばヨシ

ナム、佐渡の場まで、トモトリキ、トロ、ウラ也

ハテ、井戸成修もれ、津清ハ西園、未し候」と後又

「此もお下房也、トハチとあく、メテ賀王是ニテ、

侍一内官室の清也、リモ、津清ハニテ、カムホア、

ヨリ、西園入通、所リ、其後、有取あり、レテ、

ミセ、行けり、津清ハ、ノ家、ト、候、テ、鍵、ト、上、非、

佐渡房、ト、レバ、ミテ、タク、ハ、段、既、ト、有、ル

事、

「セ、美、奈、リ、留、寶、シ、ア、シ、内、ト、候、多、フ、サ、

度、モ、路、れ、シ、ル、ハ、留、寶、シ、リ、ク、ト、サ、和、

ア、ヒ、ト、テ、ト、ア、シ、内、侍、尚、侍、ア、

所、ナ、シ、テ、美、奈、リ、留、寶、シ、ア、シ、内、侍、尚、侍、ア、

度、モ、路、れ、シ、ル、ハ、留、寶、シ、リ、ク、ト、サ、和、

ア、ヒ、ト、テ、ト、ア、シ、内、侍、尚、侍、ア、

度、モ、路、れ、シ、ル、ハ、留、寶、シ、リ、ク、ト、サ、和、

ア、ヒ、ト、テ、ト、ア、シ、内、侍、尚、侍、ア、

度、モ、路、れ、シ、ル、ハ、留、寶、シ、リ、ク、ト、サ、和、

ア、ヒ、ト、テ、ト、ア、シ、内、侍、尚、侍、ア、



病序よりつづる所爲人かよろしくお此例上古にあま

をもむちうやま片面通じても下へ薦醫病にて手を霍

瘧よりけり所妙首院の事は少くらうと豊原利林が

備前守

の事とぞと謂無るが際の事と色白の如く人多處をとす

うけたるやあれども此子は一てさへいりまし

まよきて馬車にまわされずして引ひ歸りましとて

まげと見てうそとてはまよて馬車にて馬門着は

まよちや秋暮すけり水干の事難てしめみとを

一いづれもうりりミテヨウツモシテ馬車とて

身の相傳の馬車音と音と音と音と音と音と音と

身音と音と音と音と音と音と音と音と音と音と

一いづれもうりりミテヨウツモシテ馬車とて

うれりと馬車と馬車と馬車と馬車と馬車と馬車と

と馬車と馬車と馬車と馬車と馬車と馬車と馬車と

の音トヨリトモ相争ふとアリ。又其後歌聯歌百首立

ヒクヒルシテヤミトアリ。ウタリウタシテハソノ所代、

生之乃序ナリ。安房守重房久トシ復モハ左原守宣昌

シテナリ。但當ま謹願トシミ終歟。シテハソノ所代、

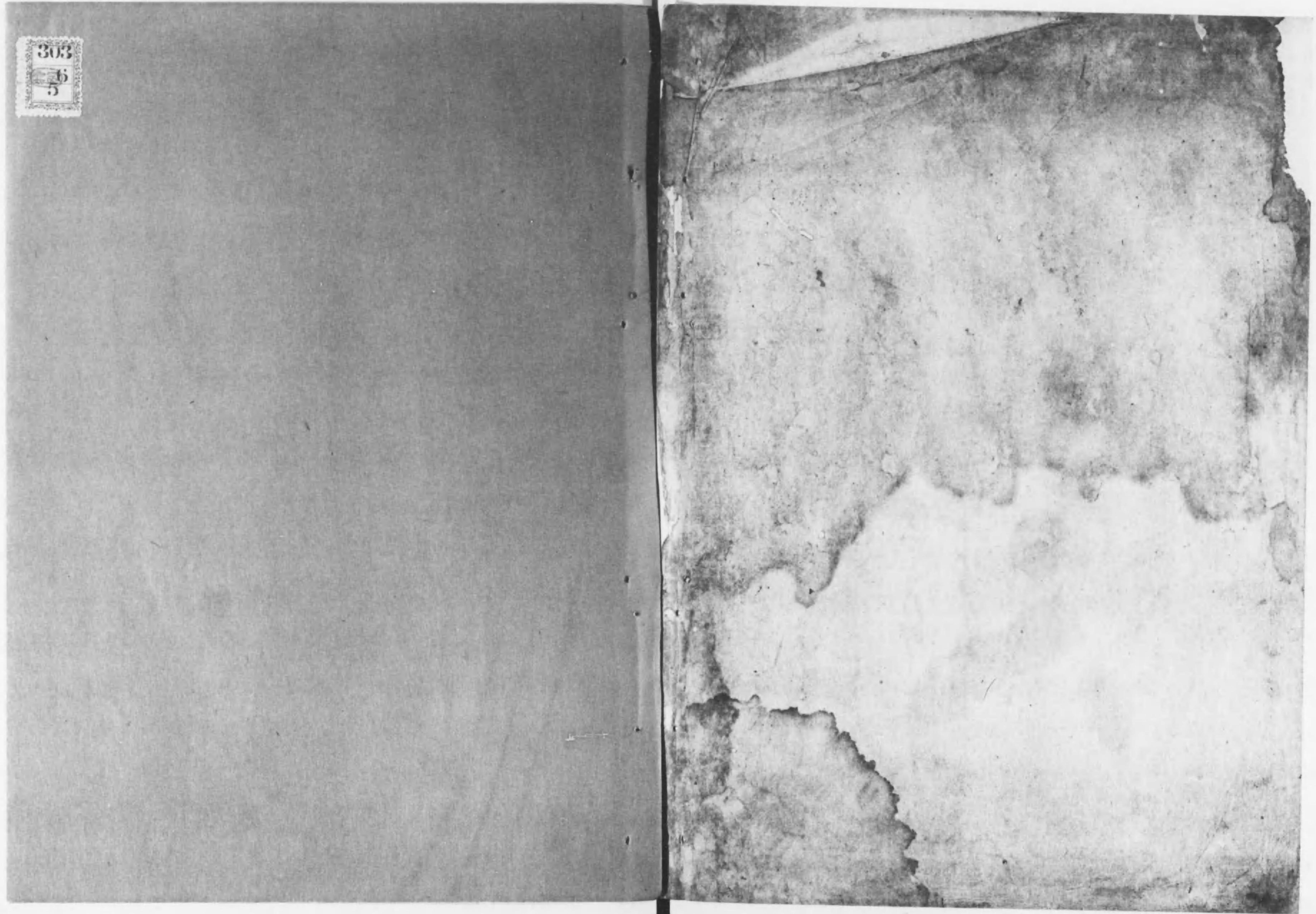
トモ秀明也。因ヘ法主凍り面もと以テクシテ一人ハ年

まつた。門上よりて観頬（くわ）、それをうなづか  
うつほむる事又ナレ。所未聞あると、ナニシテ  
かくの御色紙あり。さて天下鎮様す。讀す日等  
もと陰陽从（そなへ）らぬうち多極政殿（とうけい）  
大慶節（だいけいせつ）を経て、舞風（まいふう）、（音）大吉也。此陽も其  
まゝ、正月（まつり）とせよ。れ、のすくは、門内（もんうち）もきくね  
家（いえ）うち、（音）居候（ゐあそひ）る事無く、（音）痛（いた）事（こと）と同て  
いがこむと経け、まことに春雨（はるあめ）ふり、紫雲（しいうん）と人（ひと）に  
けられ、まことに春雨（はるあめ）ふり、紫雲（しいうん）と人（ひと）に  
氣（き）も。一、かくの紙よりて、見る事望（まねく）て、（音）氣  
君（きみ）兄弟（おとこども）、食（く）むた定物（じょうぶつ）ねい。似（おな）よ、（音）うて、（音）四里地  
呼（よ）き、（音）北向（きたむか）あり。春（はる）も、（音）天氣（あまき）も、（音）われ、（音）前  
朝（あさ）侍（まつ）、（音）自東城（じとうじょう）、（音）左鷹首度（さわしほど）を齧（く）。

の徒トハカニハ以テ清日比人トモリト  
之家ノ家門印ノ古傳ハ玄冥之藤三セリウニ暨院  
之松室題ニカシテ松下比地曲峰傳丁未松天壁人  
トヨツリ松ノ背ノ山ノ北川ノ巣と所附ニ  
村方家代ノ少翁有秀焉トムノ所次和利院ハ  
御事城點火ノ後之納高金守主之清酒清画  
之松也トシテ松ノ體例ノ如リモトナシ  
清酒ノ如ク松ノ脂膏ニアリシモ酒濃水薄シテ  
茶園ニシテナリシモ山ノ下諸道ノ例又  
毛參ノ如ク松ノ脂膏トヒル而漏、有其在宵乃和利院  
之松ノ如ク松ノ脂膏トヒル而漏、有其在宵乃和利院  
今より時一連と矣アリシモ此ノ如ク松ノ脂膏トヒル而漏、有其在宵乃和利院

脣弓の上に作れり我の妙旨在る崎也  
萬葉竹馬の事至下三軒の御子じたうと事第1  
左ノ写ナタ家に通シテナリ望ム  
中ノ久夜ノ室中  
萬葉鳥入ノ子を吟く所モアキノハシテ  
伯牙吹琴ノ之ヲ重比伶心ニカク  
天下力丸樂手ノ如ク一曲の如ク  
ソト貝翫乃吉風ノ音吹  
清濁萬葉之のノ系行  
引子とあまて寧々妙曲多喜けり

303  
5



終